みめぐみの

第25部

みめぐみの

第25部

大谷光道著

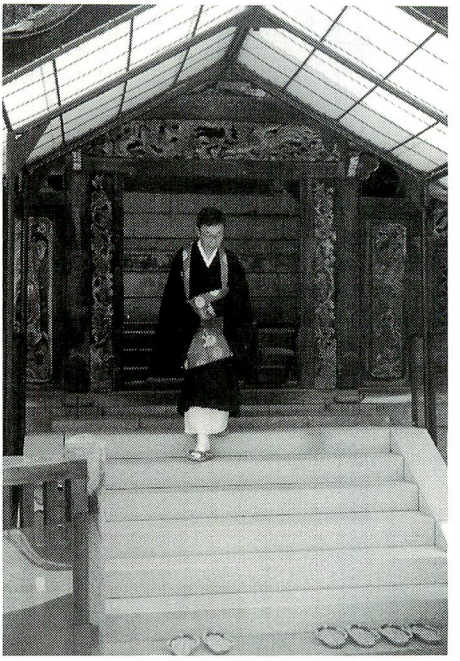
目次

お釈迦様は？……2
釈迦教と弥陀教……5
仏様同士の情報交換……7
出世本懐……14
『法華経』もある……16
読者の頁……22
お知らせ……30
あとがき……31

お釈迦様は？

「浄土真宗では阿弥陀様や阿弥陀様の本願のお話が中心で、お釈迦様のお話がめったに出てこないのですが、何故でしょうか。仏教を開かれたお釈迦様が教えの中に出ておいでにならなくても、やはり仏教なのでしょうか。」というご質問がありました。

まことにもっともなご質問だと思います。確かに私たちのところでは阿弥陀様のお話が中心で、ご本尊も阿弥陀如来だし、お釈迦様のお話やお姿には



本廟参拝（8月）

めったにお目にかかりません。強いて言えば、四月八日の花祭りに象に乗ったお姿で甘茶をかけるときとか、お寺の山門に上がると釈迦三尊が安置されその真ん中においでになるくらいですね。これに比べて禅宗なんかのご本尊は釈迦如来ですし、他所の宗旨では成道会（じょうどうえ）や涅槃会（ねはんえ）を盛んにお勤めされます。成道会は「成道」つまりお釈迦様が覚りを開かれたことをお祝いする法会で、涅槃会はお釈迦様のお徳をたたえて御入滅の日とされる二月十五日に行う法会です。

しかし、決してお釈迦様を無視しているわけではありません。いやそれどころか、釈迦・弥陀二尊と言うように、お釈迦様と阿弥陀様は「同格」です。そして何よりも忘れてはいけないことは、浄土真宗の根本となっている聖典は『浄土三部経』《『仏説無量寿経（大経）』『仏説観無量寿経（観経）』『仏説阿弥陀経（小経）』》というお釈迦様のご説法です。宗祖親鸞聖人の教えはもちろん、七高僧（親鸞聖人が浄土真宗の教えをご自身にまで伝えてくださっ

た方と仰がれる七人の高僧＝龍樹菩薩、天親菩薩、曇鸞大師、道綽禅師、善導大師、源信僧都、法然上人）の示された教えの内容のすべてはこの『浄土三部経』の上に成り立っています。

これは、お釈迦様がそれまで誰も見いだすことの出来なかった阿弥陀様の教えを発見してそれを私たちに説いてくださったことによって、私たちが手を伸ばしても直接には届かない阿弥陀様の教えをお釈迦様が私たちの身近に近づけてくださった、ということです。そしてそれをさらにかみ砕いて私たちを導いてくださっているのが七高僧であり親鸞聖人なのだ、ということです。

ですから、お釈迦様は私たちの「教主」なのです。私たちが阿弥陀様に帰命し合掌・礼拝すること自体、既にお釈迦様に帰依していることの結果だと言えます。私たちはお御堂にお参りする前に山門をくぐり抜けますが、それはその上においでになるお釈迦様のご説法を聞いて、阿弥陀様の前に進むと

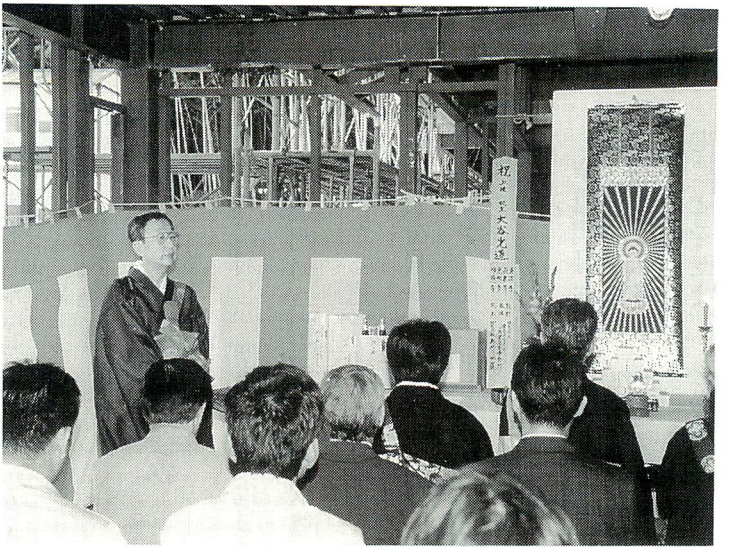
いう意味があることを考えイメージすると、このことがいっそうよくわかります。

釈迦教と弥陀教

これに対し、聖道門の宗旨ではどうでしょうか。

聖道門（しょうどうもん）の「聖」は大聖釈尊（だいしょう）のことでその内容である覚りを指し、「道」はそこに至る道である修行を指します。つまりこの世で修行し覚られたお釈迦様を自分自身のお手本としていただいていくということで「教主」ではあるのですが、我々浄土門での「教主」とその趣がだいぶん違います。それは次のように考えると、いっそう明らかになってくるはずです。

聖道門はお釈迦様をお手本として修行することで、言い換えればお釈迦様と同じ手法によってこの世で覚ろうとするのですから、お釈迦様が「私と同じことをせよ。」と教えられるのに従うことになり、その意味でこれを「釈



上棟式

迦教」と呼ぶことが出来ます。

一方、浄土門ではお釈迦様が「お前たちには私のような修行は出来ないのだから、そのようなお前たちのために阿弥陀様の教えを授けるのだ。」と仰って、阿弥陀様の浄土を指し示してくださるのに従っていくことになり、こちらは「阿弥陀教（略して弥陀教）」と呼ぶことが出来ます。

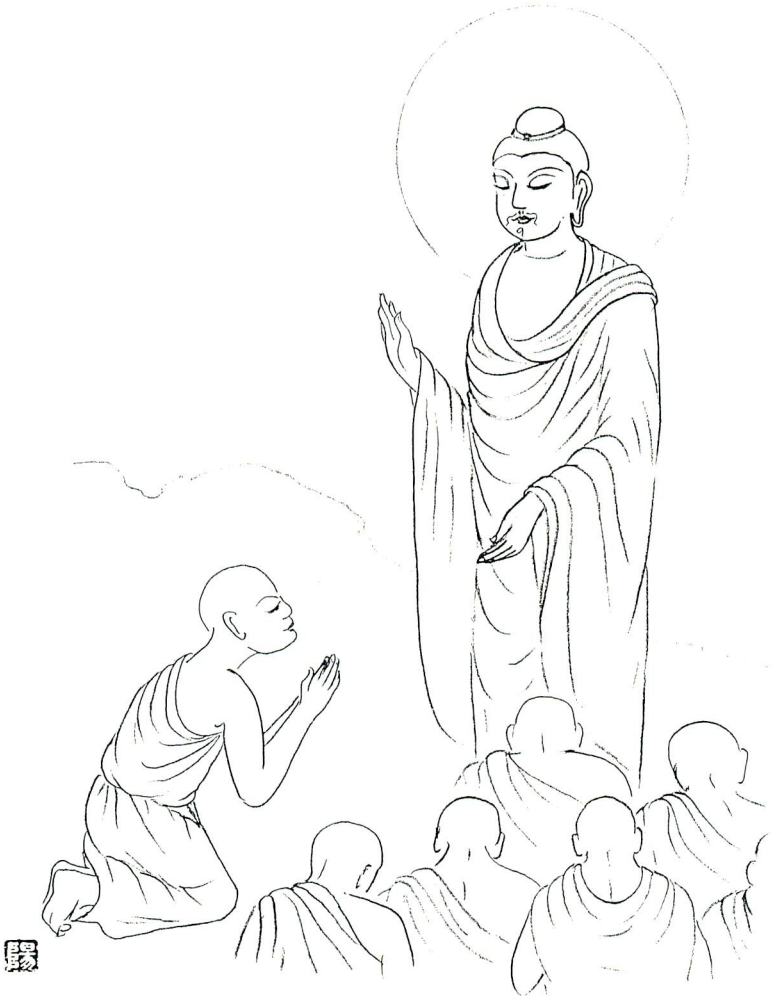
前に龍樹菩薩の説かれた難行（なんぎょう）と易行（いぎょう）についてお話ししましたが、お釈迦様の教えつまり仏教は大きく分けてこの二つがあり、「私と同じことをせよ」と教え

られる道を進むのが難行道・聖道門で、「お前たちには私と同じことは出来ないのだから、……」と教えられる道を進むのが易行道・浄土門だと言ったのを思い出してください。この二つをお釈迦様の側から見ると、難行道・聖道門は釈迦教、易行道・浄土門は弥陀教ということになります。

たとえば、水泳の先生が生徒を海岸から前に見える島まで渡らせることを考えてみましょう。生徒たちを泳げる子と泳げない子に分けて、泳げる子には「私の泳ぐのを見習いながら、私の後を泳いで付いておいで。」と言い、泳げない子には「泳げない君たちはあちらの○○先生の舟に乗せてもらって渡りなさい。」と言うようなものです。言うまでもなく、この先生がお釈迦様、○○先生は阿弥陀様です。

仏様同士の情報交換

お釈迦様は「○○先生に乗せてもらいなさい」と仰るだけでなく、すぐに



は拝むことが出来ない舟の主である阿弥陀様のことはもちろん、舟の形をはじめ海の様子、その他何から何まで懇切丁寧に教えられました。それが浄土の教え・弥陀教なのです。

その浄土の教えは『浄土三部経』に説かれました。その中でも中心になるのが『大経』で、『大経』はお釈迦様が耆闍崛山（ぎしゃくっせん）《または霊鷲山（りょうじゅせん）。中インドのマガダ国の首都王舎城（おうしゃじょう）（現在のラージギル付近）の東北にあり、『大経』や『法華経』を説かれた山。》で、一万二千人の聖者たちにお説きになったものです。

その本文に入る前の前置きの部分（発起序（ほっきじょ））、いわばこのお経の目的、このお経を説かれるに至った動機の部分を、それも一部分ですが意訳してみました。

そのとき世尊は、ご様子が麗しくお姿も清らかでお顔のかがやきもま

ことに厳かであった。

世尊の「誰でも聞きたいことがあれば……」との促しを受けて、阿難が座を立ち右の肩の衣をまくって（インドの儀礼）両膝を地につけて合掌し、質問申し上げた。「今日の世尊はご様子が麗しくお姿も清らかでお顔のかがやきもまことに厳かであること、清らかな鏡の透きとおるようであります。ご威徳があふれておられること、限りありません。こんなお姿は今まで一度も拝んだことがありません。私の思います所を申し上げますと、

今日世尊はお体全体に奇瑞（きずい）の相が感じられます。

今日世尊は無数の諸仏を一時に普（あまね）く拝見できる境地に入っておられるようです。

今日世尊は仏の眼をもって衆生を涅槃に入らしめるお力があふれています。

今日世尊は最勝の智慧に満ちておられます。
今日世尊は如来の徳をすべて具えておられるようであります。
過去・未来・現在の仏が、仏と仏とで互いに念じられると聞いておりますが、世尊も今諸仏を念じておられるのでしょう。どのようなわけで、このようにご威徳が高く光々としておられるのでしょうか。」
そこで世尊は阿難に向かわれ「阿難よ、諸の神々（仏教の守護神）が汝に教えて、私に問わせているのか。それとも自分の智慧によってか。」
阿難は答えた。「神々が来て私に教える者があるのではありません。自らの拝んだところによって、この深いわけをお尋ねしているのです。」
世尊は仰った。「善いかな、阿難。そなたの問いはまことに快いものだ。そなたの深い智慧とすばらしい弁才を発揮して広く衆生にもわからせようと、この深いわけを問うたものと思う。
如来は無上の大悲を以て迷いの世界を哀れんでおられる。この世にお

生まれになるわけは、いろいろの教えを広め、真実の利益を恵み与えたいと思われるからである。無量億劫を経ても、このような如来にお遇いすることは難しい。これは優曇華（三千年に一度花が開くと言われる）がまれに開くようなものだ。今の問いは利益するところが多く、一切の諸天人民を目覚めさせることであろう。阿難よ、まさに知りなさい。

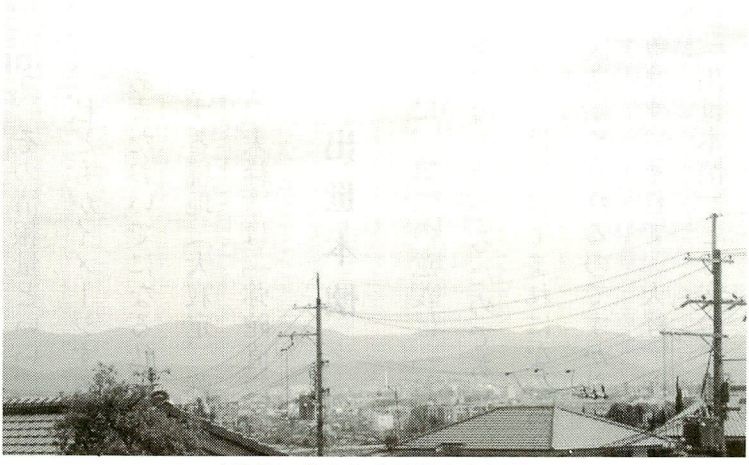
――中略――　阿難、諦かに聴け、今から説こう。」

阿難が答えた。「楽しんでご説法をお聞きしたいと思います。」

（原文巻末）

お釈迦様のご威徳がふだんから高かったのはもちろんですが、お弟子の阿難尊者との質疑の様子からわかるように、この『大経』をお説きになったときには、今まで一度も拝したことのないお姿を示されたのです。

このやりとりの中に二つの重要な意義があって、その第一はお釈迦様がそのまま阿弥陀様となってこのお経をお説きになったということです。その境



寺務所二階から京都市内を望む

地は「大寂定弥陀三昧」と言われるものです。先の口語訳の中で、お釈迦様が示された瑞相が五つありましたが、この五つの瑞相の中心は第二の「無数の諸仏を一時に普く拝見できる」という境地（普等三昧）で、そのあとの「過去・現在・未来の仏と仏とが互いに念じられる（仏仏想念）」のと同じ内容です。この境地は仏様同士が共有されるものであって、もちろん私ども凡夫のとうてい及ばぬ世界です。

これを今のＩＴ技術にたとえてみると、仏様同士の情報交換とも言えるものでし

よう。その情報量といい、スピードといい、さらにその情報の処理能力といい、私どもがイメージすることも出来ないほどのもの、と言えるでしょうか。

あまたおいでになる仏様の根本は阿弥陀様ですから、結局これは阿弥陀様を念ずる境地（大寂定、弥陀三昧）だということになり、これからお説きになる『大経』は「弥陀直説の経」とも言われます。

出世本懐

次に、第二の意義は「お釈迦様がこの世に生まれられた真の目的は弥陀教をお説きになるためであった」ということです。先の意訳にあるように、「この世にお生まれになるわけは……真実の利益を恵み与えたい」と仰って説き始められるのですから、その内容がこの大経に記されていることがわかります。それで『大経』が「出世本懐（しゅっせほんがい）の経」であると言われているのです。「出世本懐」とは字のごとく「この世にお出ましになった本当の望み」とい

うことです。

ところで、少しひっかかるところがあります。それは、はじめのうちはお釈迦様ご自身のご様子についてのお釈迦様と阿難尊者とのやりとりなのですが、いよいよ本題に入るところで「私は……」となるのかと思えば、「如来は無上の……」と仰って急に「如来」が主語になるところです。そして、ここから如来一般（諸仏）のこととして、つまり「如来とはこういうものだ」というお話に変わるからです。ここのところをどう解釈したらいいのでしょうか。

「如来」は、よく耳にする阿弥陀如来、釈迦如来、大日如来、薬師如来などをはじめとして数限りなくおいでになって、すべてをひっくるめて「諸仏」とお呼びします。ここで「如来」と仰るのもこの諸仏のことで、「お釈迦様がその諸仏を代表してこのお経をお説きになる」と読めば、つじつまが合ってきます。

『法華経』もある

また、天台宗や日蓮宗では『法華経』こそ出世本懐のお経であると主張されます。それは『法華経』の中に

唯だ一大事の因縁を以ての故に出現せり

とあることによるのです。しかし『法華経』は聖者のみが修行する教えで、凡夫の修行できる教えではありません。『大経』に説かれる念仏の教えは聖者も凡夫も善人も悪人も皆救われる易行の道です。

さてそれでは『大経』と『法華経』と、いったいどちらが本当の出世本懐経なのでしょうか。私は両方とも出世本懐経と考えてもかまわないと思います。お釈迦様は一切衆生を覚らせることがご本意であったはずで、『法華経』の合う人は『法華経』の教えに、『大経』の合う人は『大経』の教えに従え

完成間近の寺務所

ばいいのです。教えが自分に合っていることが大切で、それが仏教の特徴です。

いくら立派な教えがあるとしても、教えが一人歩きしていては何もなりません。それを学ぶ者がいて、その者のためにあるのが「教え」だからです。教えとその教えを受ける人とがセットとして考えられなければ何もなりません。たとえば、どんなに良い薬でもその人に合わなければ場合によっては毒薬となったり、もっとひどいときには副作用のために命を落とすことさえあります。これと同じことです。

そもそも一つの教えでだれもが救われるのなら、お釈迦様のご苦労は遙かに少なくてすんだはずです。仏法は「八万四千の法門」と言って、極端に言えば私たち教えを受ける人間の数だけ教えの数があっても不思議ではないのです。大切なのは「誰もかも覚らせよう」というのがお釈迦様のご本意で「仏教は平等を説く教えだ」とよく言いますが、「誰でも覚れる」という意味において平等でなければなりません。

ただ、「どんな教えを広めても自由だ」という「法律上の信教の自由」をそのまま持ち込んで、「仏教だと言っておけば、どんなことを言っていても仏教だ。」というようなのは問題で、たとえば「覚り」への道筋が示されていないようであれば、それは仏教とは言えません。

――〈以下次号〉――

《発起序　原文（書き下し）》

そのときに世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして光顔巍巍とましまします。尊者阿難、仏の聖旨を承けてすなはち座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、長跪合掌して、仏にまうしてまうさく、「今日世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして、光顔巍巍とましますこと、明らかなる浄鏡の影、表裏に暢るがごとし。威容顕曜にして、超絶したまへること無量なり。いまだかつて瞻覩せず、殊妙なること今のごとくましますをば。やや、しかなり。大聖、わが心に念言すらく、今日世尊、奇特の法に住したまへり。今日世雄、仏の所住に住したまへり。今日世眼、導師の行に住したまへり。今日世英、最勝の道に住したまへり。今日天尊、如来の徳を行じたまへり。去・来・現の仏、仏と仏とあひ念じたまへり。いまの仏も諸仏を念じたまふことなきことを得んや。何がゆゑぞ、威神光々たることいまし、しかるや」と。

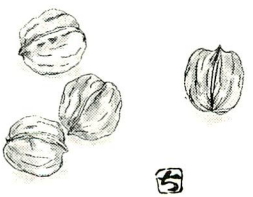
ここにおいて世尊、阿難に告げてのたまはく、「いかんぞ阿難、諸天の汝

を教へて仏に来し問はしむるや。自ら慧見をもって威顔をとへるや」と。阿難、仏にまうさく、「諸天の来りてわれを教ふる者あることなし。自ら所見をもってこの義を問ひたてまつるのみ」と。仏のたまはく、「善いかな阿難、問へるところはなはだ快し。深き智慧、真妙の弁才を発し、衆生を愍念せんとしてこの慧義を問へり。如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したまふ。世に出興するゆゑんは、道教を光闡して群朋を拯ひ、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。無量億劫にも値ひがたく見たてまつりがたきこと、なほし霊瑞華の、時ありて、時にいまし出づるがごとし。いま問へるところは、饒益するところ多し。一切の諸天・人民を開化す。阿難、まさに知るべし。如来の正覚は、その智量りがたくして、導御するところ多し。慧見無碍にして、よく遏絶することなし。一飡の力をもって、よく寿命を住めたまふこと、億百千劫無数無量にして、またこれよりも過ぎたまへり。諸根悦予してもって毀損せず。姿色変せず、光顔異なることなし。ゆゑんはいかん。如来は、

定と慧と究暢（くちょう）したまへること極まりなし。一切の法において自在を得たまへり。阿難、あきらかに聴け、いま汝がために説かん」と。対へてまうさく、「やや、しかり。願楽（がんぎょう）して聞きたてまつらんと欲ふ」と。

《参考文献》

『浄土三部経講義　改訂新版』柏原祐義著　平楽寺書店
『浄土三部経の意訳と解説』高木昭良著　永田文昌堂



質疑応答

北海道小樽市　小田　信保さん

問

「信心と差別」

浄土にも報土と化土があると先日初めて教えられました。又昨年も聞いたのですが、仏教で云う「長者の万灯と貧者の一灯」の話で、今もって寄進の大小によって信心までに差がつくのがどうしてもわかりません。

是非お教え頂ければ幸甚です。

答

お尋ねの趣旨は、

「長者の万灯と貧者の一灯」の話を聞くと、仏教では「長者はたくさん寄進するから信心が篤く、貧者は寄進が少ないから信心が薄い」と言っている

ことになるが、寄進の額の多少によって信心の篤さを計られてしまうのはおかしい。何故そうなのか。

ということだと思います。

どのようなご経験から「寄進の大小によって信心までに差がつく」とお感じになったのかわからないので、「答えが当たっていない」とお叱りを受けるかも知れませんが、思いつくままお答えします。

結論を先に言えば、もちろん小田さんが仰るように寄進の多少と信心の篤さとは本来無関係で、寄進の額によって信心の篤さが計られるとすれば、それはおかしいことです。それは信心は私たち一人ひとりの内面世界のことで、信心深いということは平たく言って「それだけ心の豊かな日暮らしをしている人だ」とは言えるにしても、寄進の額とは別のことだからです。

ただ、次のような傾向があることを時々感じます。つまり、信心が深まるにつれて、その結果としてどんな人でも、以前よりは多く寄進したくなるという傾向で、これは自然の成り行きでしょう。寄進のことを「喜捨」と言うのもこのためで、その字のごとく「喜んで捨てる」という心境です。ですか

ら、その人の「心のまま」に寄進の額が決まるというのが、寄進の本当のあり方でしょう。しかし「心のまま」とはいってもご本人の財布はもちろん環境、たとえばご家族の理解の程度など、諸条件を無視できないことは言うまでもありません。

ところで、「長者の万灯と貧者の一灯」について、小田さんは反対の意味に勘違いされているように思います。

「長者の万灯より貧者の一灯」というのは、「阿闍世(アジャセ)王がお釈迦様をもてなし、宮殿から祇園精舎へのお釈迦様の帰り道に万灯をともした時、貧乏な一老女も灯明をかかげようと思い、わずかの銭を都合して一灯をともしたところ、王のあげた灯明は消えたり油が尽きたりしたが、老婆の灯明は終夜消えなかった」という『阿闍世王授決経』の故事から、「貧しい人の誠意のこもったわずかなささげ物は、金持ちの世間体を飾った多くのささげ物よりまさっている」という、真心の尊さをいうたとえ(『大辞林』より)で、寄進の額そのものの高低ではなく、その人にとっての精一杯の寄進が尊いことを教えたものです。

また「報土と化土」について触れられていますが、「寄進の大小」との関係がわかりかねるところです。

富山市南栃市　河合　寛さん

問

南無阿弥陀仏、ほんとうの極楽についてわかり易くお説きいただき、何度も味わっています。為楽往生にならないようにしていくことが大切で究極の落ち着きをいただくことと確信します。教行信証の真仏土巻に常楽我浄と書かれてあります。このことについて私にわかるようにお聞かせ頂きたいものです。もう一点、証巻に四顚倒（してんどう）の意味について知りたく思います。どうかよろしくお願い申し上げます。合掌

答

常・楽・我・浄は四徳とも言って、涅槃（覚り）の四つの徳のことで、

常：永遠に変わらない

楽：楽しみで満ち足りている

我：自在である

浄：煩悩のけがれがない

ことです。

これは覚りの世界だけで言えることで、凡夫の経験できる世界ではありません。凡夫はこの逆である無常・苦・無我・不浄の毎日を送っていますが、そのような現実にありながら、誤って常・楽・我・浄であると思うことを四顛倒と言います。

この世は「諸行無常」で、「常」と思えるものは何一つありません。私たちの命も永遠ではないし、あらゆるものは刻々と変化しています。覚りの境地に入ることで「常」を見いだせるのです。本当の楽しみ、いつも変わらぬ楽しみに浸ることは出来ず、煩悩による「苦」がついて回っています。「諸法無我」ということをいつも思わされ、「我」と言えるもの、いつも思い通りになっているものもありません。一瞬とても「浄」であるということは難しいことです。

●この世をば　我が世とぞおもふ　望月の　欠けたることの　なしと思へば

（藤原道長）

●祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり　沙羅双樹の花の色　盛者必衰の

理をあらわす　おごれる人も久しからず　ただ春の世の夢のごとし
たけき者も遂には滅びぬ　偏に風の前の塵に同じ　（平家物語）

いずれも、無常・苦・無我・不浄を、常・楽・我・浄と思いたい、思ってしまった人たち（四顛倒）のことですが、「人ごと」としては片付けられませんね。

ご質問の中で「私にわかるように」とありますが、ありきたりの答えになってしまいました。もっと別のことをお望みだったのでしょうか。

感想意見

（特集号によせて）　富山市南栃市　河合　寛さん

御遷座特集の五頁に書かれている文に、これからの大谷本願寺に希望と期待を感じています。……これから、新しい大谷本願寺で開く法座では一方的に私が話するのではなく、皆さんの生活のお話を聞きそれに教えられ共に楽しんでいくこ

とが大切だと考えております。……浄土真宗は無条件の救いであるとお聞きしています。在家の苦悩のままに救われていくこと、ありがたいことです。南無阿弥陀仏。合掌。

島根県江津市　大谷　瑩俊さん

御当主の今迄の公私に亘る御苦労と此度の御遷座大谷本願寺の御再建は何よりの事と存じます。昔「対嵐坊」と称した別邸もありました処です。新天地には誠に相応しい地と思われます。完成の日をお待ち致しております。

大谷瑩俊さんは、当家第二十一世大谷光勝（こうしょう）・厳如（ごんにょ）上人の孫に当たる方で、筆者の得度（昭和三十年）に際しては作法を中心にご指導、またお世話をいただきました。その後僧職を離れ一般企業にお勤めになりましたが、いつも温かく筆者を見守ってくださっています。

なお、終戦後数年経って手放すまで嵯峨の渡月橋のすぐそばにあった「対嵐坊」で筆者は生まれました。母がたまたまここにいて予定より早く出産したので、

烏丸七条ではなくここで生まれました。このときから嵯峨にご縁があったのかも知れません。《筆者註》

東京都品川区　鈴木　健太郎さん

（二十四部によせて）

今回絶壁をよじ登る比喩がとてもわかりやすく印象に残りました。自力で化土に到達するAさんと阿弥陀様に他力の信心で報土に連れていってもらえるBさんとの対比で阿弥陀様の御本願とは何かがよく理解できました。

（特集号によせて）

今回の御遷座特集のおかげで、今までのいきさつについて初めて体系的によく理解することができました。巻末のマスコミ記事掲載もとても良い試みだと思います。買いそびれておりました女性自身誌の記事をおかげ様で手元に置けるようになりました。

お知らせ

本願寺寺務所移転建設実行委員会

京都嵯峨野　大谷本願寺の建立にあたりご協力有難うございます。

本年七月発刊の『本誌・大谷本願寺御遷座特集』でご報告致しましたように、新寺務所は今年三月に起工式を行い、七月には建築に着工することができました。その後、八月には上棟式へと順調に工事も進み、本誌発刊の頃にはいよいよ完成を迎えることになりました。ここに皆様方の篤いご助力に深く御礼申し上げます。

来る十一月二十七日には御遷座御着法要、寺務所落成法要、そして記念式典が開催される運びとなりました。寺務所二階の仮本堂には御本尊阿弥陀如来、親鸞聖人御真影（木像）をはじめ諸尊にご安座頂き、光道台下の御親修で法要が厳修されます。

ここに大谷本願寺は一つの節目を迎える訳ですが、さらに本堂の建設という大きな事業があります。

今後とも皆様の物心両面からの熱いご支援を心よりお願い申し上げます。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今春三月三十一日の「御遷座」を受け、前回七月には「大谷本願寺　御遷座特集」として『みめぐみの』の執筆に当たって頂きました。

今号は「浄土真宗の教えはお釈迦様があまり出ておいでにならないけど、それでも仏教なのですか？」との、言われてみればなるほど〝気になる〟質問を解きほぐしてくださり、浄土真宗におけるお釈迦様のお役目を明らかにしてくださいました。この後どうなるのか、お話は次号に続くことになりました。楽しみにお待ちください。

建設実行委員会から「お知らせ」がありました通り、大谷本願寺寺務所が移転致します。それに伴いまして当刊行委員会も新住所内に移転致します。今後ともご意見・ご感想・ご質問等どしどしお寄せ下さい。

新住所　京都市右京区嵯峨鳥居本北代町二十一
電　話　〇七五（八八二）六二六二
ＦＡＸ　〇七五（八八二）六二二〇

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい
※送料　1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円
○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です
※送料　5～6冊＝210円、7～9冊＝290円
○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

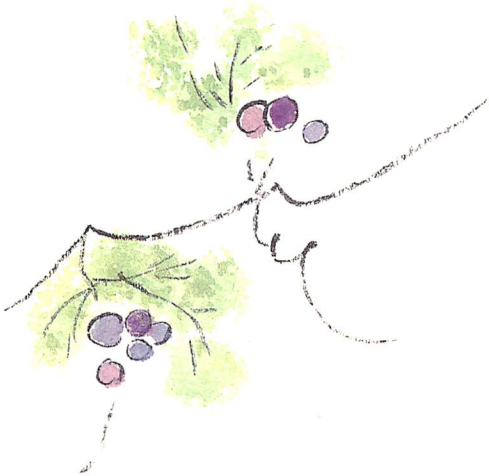
以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの　第25部

2005年11月5日　印刷
2005年11月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道
発　行　みめぐみの刊行委員会
〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060－5－56990
印　刷　㈱中外日報社



みめぐみの刊行委員会刊